

2026 年 8 月 3 日

【SUPER GT 第 4 戦 / 富士スピードウェイ レポート】
ヨコハマタイヤを装着する 2 台のフェラーリが、予選と決勝で高いパフォーマンスを見せた



6 月に予定されていたマレーシア大会が延期となった 2026 年の SUPER GT は、3 か月のブレイクを挟んで第 4 戦を迎えた。舞台は第 2 戦と同じ富士スピードウェイだが、前戦は 3 時間の耐久レースだったのに対し、今大会は 300km の距離を争う戦いとなる。

うだるような暑さの中で行われた公式予選では、今大会からドライバーラインナップが変わり、篠原拓朗選手の相棒として川端伸太郎選手が加入した PONOS FERRARI 296 EVO が GT300 クラスで堂々のポールポジションを獲得した。この日の走り出しとなる公式練習からトップタイムをマークし、篠原選手が担当した Q1 もグループトップで通過した PONOS FERRARI 296 EVO は、予選日を完全制覇。長いインターバルの間にマシンのセットアップも進み、また今大会に向けて選択したタイヤも最適なコンディションの中で Q1、Q2 とともに 2 位に対し大きな差をつけてトップタイムを奪取した。また、3 位には今大会からエボモデルにスイッチした UNI-ROBO BLUEGRASS FERRARI(片山義章選手／ニコラス・クルッテン選手)、4 位には CARGUY Ferrari 296 GT3 EVO(ザック・オサリバン選手／梅垣清選手)と、フェラーリ×ヨコハマタイヤ勢が上位に並ぶ形に。GT500 クラスで唯一ヨコハマタイヤを履く WedsSport BANDO GR Supra(国本雄資選手／阪口晴南選手)は予選 12 位だった。

決勝日はスタート前に大粒の雨が落ち、路面は一気にウェットへ。それでも降雨は一時的だったことから、すぐに乾いてくることを見据えて大半の車両はドライタイヤを選択。安全を考慮し、レースはセーフティカー(SC)先導のもとでスタートした。4 周を終えて SC が隊列を離れ、グリーンフラッグが振られたが、GT500 クラスで 3 台が絡む多重アクシデントが発生し、すぐに赤旗中断。約 45 分間の中断ののち SC 先導で再開された。本格的にレースがスタートすると、PONOS FERRARI 296 EVO の篠原選手が快走を見せ、2 番手との差を広げていく。上位陣の中では早めの 31 周を終えたタイミングでピットに向かうと、川端選手に交代しタイヤを履き替えて後半スタントへと向かっていった。その後、上位争いをしていたライバルたちも続々とピットインするが、川端選手はコースに戻ってきたこれらのライバルをかわし、事実上のトップをキープする。タイヤを 2 本のみ交換する作戦でピット作業時間を削ってきた 1 台には先行を許してしまうが、すぐに追いつき熾烈なトップ争いが繰り広げられた。最終コーナーをコンパクトに回った川端選手が一瞬前に出るも、クロスラインを取った相手がホームストレートで並びかけると、両者サイド・バイ・サイドのまま 1 コーナーへ。そのまま 100R までバトルは続いたが、最終的にアドバンコーナーで相手が先行し、勝負あり。川端選手はダンロップコーナーでも並びかけようとしたが、やや行き過ぎてしまい、逆に相手とのギャップを広げてしまうこととなった。



トップ 2 台が激しいバトルを披露している間に追いついてきたのが、3 番手を走行していた CARGUY Ferrari 296 GT3 EVO。後半スティントを担当していたオサリバン選手は、川端選手のペースが落ちてきたところを見逃さず、GR GT コーナーでオーバーテイクに成功した。ただし川端選手も応戦し、再び 2 番手を取り戻す。2 台での 2 位争いは、最終盤には後続の 1 台も加わった 3 台でのバトルへと発展。最終ラップでは川端選手のほんのわずかな隙を突かれ、2 台が先行し、CARGUY Ferrari 296 GT3 EVO が 3 位でチェッカーを受け今季初表彰台を獲得。ポールポジションからスタートしたものの、終盤は苦しい戦いとなった PONOS FERRARI 296 EVO は 4 位でフィニッシュした。

GT500 クラスの WedsSport BANDO GR Supra は国本選手でスタート。ややペースに苦しみ中ミニム周回を走破すると阪口選手へ交代した。「フリープラクティスで手ごたえのあったタイヤを選んだ」という後半スティントの阪口選手は、上位陣に引けを取らないベストラップを記録し、一時はペース良く周回。終盤は苦しかったというものの、しぶとく戦い抜いて 10 番手まで追上げてチェッカーを受け、第 2 戦に続き入賞を果たした。



■ ザック・オサリバン選手(CARGUY Ferrari 296 GT3 EVO)

【今回の成績：GT300 クラス 3 位】

今回は僕たちと同じパッケージで似たようなキャラクターの相手がライバルだという難しさと、僕たちのクルマは今回トップスピードが少し足りなかったもので、なかなかオーバーテイクに届かないという難しさがありました。今シーズン、ここまで 2 戦があまり良くなかったので、表彰台が上がれたことは率直に嬉しいです。次戦の舞台となる鈴鹿は昨年優勝を飾ったサーキットです。ベストを尽くして次もいい結果を出したいと思います。

■ 梅垣清選手 (CARGUY Ferrari 296 GT3 EVO)

【今回の成績：GT300 クラス 3 位】

今回はセットアップの方向性の関係で、レースの中では難しい場面もありましたが、クルマのポテンシャルは非常に高いですし、レースを通してタイヤの美味しいところをうまく使いながら戦えたと思います。予選でのニュータイヤのグリップも高かったですね。予選でも決勝でも、自分の中でもいい走りができたと感じられたところがありました。もちろん課題もまだあるので、そこはしっかり修正し、次は予選、決勝ともに 1 位を取れるように頑張ります。

■ 篠原拓朗選手(PONOS FERRARI 296 EVO)

【今回の成績：GT300 クラス 4 位】

僕たちのチームは別のカテゴリーにも出ていて、GT のお休み中にもいいセットアップを見つけることができていたので、それがポールポジション獲得につながりました。ただ、予選に焦点を当てていたのでロングランのセットアップを詰め切れていなかったのが今回の敗因の一つです。これまでの 2 戦に比べれば大躍進。このペースで前に進んでいければ、後半戦にはさらにいい結果に結び付けられると信じて頑張ります。

■ 川端伸太郎選手(PONOS FERRARI 296 EVO)

【今回の成績：GT300 クラス 4 位】

トップでバトンを受け取ったので何とか守り切りたかったのですが、バトル中にタイヤかすを拾ってしまって。ロングランのセットアップを詰められていれば、もう少し簡単にタイヤかすを落とせたのですが、なかなか取れずにペースダウンにつながってしまいました。悔しいレースになりましたが、上位で戦えていることは間違いないし、予選では一発の力を見せることもできました。自信を持って次戦に好に臨みたいです。

■ 国本雄資選手 (WedsSport BANDO H GR Supra)

【今回の成績：GT500 クラス 10 位】

タイヤのウォームアップはそれほど悪くなかったのですが、スタートしてから序盤の数周は、ちょっと周りについていけないペースがありませんでした。ここで無理をしてもタイヤを痛めてしまうし、僕のステントではもともとロングラン向けのタイヤではなかったのも、なんとか粘って阪口選手につながりました。後半ステントに選んだのはフリープラクティスでロングランをしたときに感触の良かったタイヤだったので、阪口選手もしぶとく走ってくれてポジションを上げられたことは良かったです。

■ 阪口晴南選手 (WedsSport BANDO H GR Supra)

【今回の成績：GT500 クラス 10 位】

今回、チームのピット作業がとても早く、ライバルとのギャップを削ることができたのですが、ちょうど雨が少し降っていたタイミングでのタイヤ交換だったので、アウトラップでの損が他車に比べて大きかったかなと思っています。僕はロングステントだったので、終盤は本来のワーキングレンジから少し外れてしまったのかなという印象ですが、レンジに入っているときのペースは悪くなかったですし、前を追いつけている状況だったので、そこは前向きにとらえています。これから先、決勝のペースが大事なコースが続いているので、引き続き粘り強く戦えるよう、頑張っていきたいです。